道路開鑿物語

龜田の久藏

伊藤永之介作

秋田縣平鹿郡の增田から田子内に通ずる途中に眞人のへぐりといはれるところがある。

今日では赤松生ひ茂る眞人山の崖の下、成瀨川の淵にのぞんだ坦々たる道路となつてゐるが、今を去るおよそ百六十年前の安永年間に、龜田の久藏と呼ばれる義人が獨力で斷崖を切り拓くまでは、一歩あやまれば成瀨川の淵に落ちて生命を失ふといふ、秋田縣の南部から奥州山脈を越えて岩手宮城に出る街道の一番の難所であつた。さうかといつて、眞人山の北方を闇狩澤に路を取るとなると、大變な廻り路になるので、旅を急ぐ者はもちろん、多くの人はとかく危險を犯して此所を通りがちで、そのため一命を失ふものが少くなかつた。

そのころのある夕。一人の雲水姿の旅人がそこを通りかゝると路ばたの木の枝に、何足かの眞新しい草鞋がかけてあるのが眼についた。

「これはこれは、奇特な人もあるものだな、路がけはしいから怪我をしない用心に、草鞋を換へて行けといふのかな、どれ、それでは一つ貰つて行くか。」

旅人は草鞋を穿き換へて、岩根をつたつて歩き出したが、やがてぴたりと足をとめた、眼の下の成瀨川の瀨に臨んだ岩かげにみすぼらしい小屋があつたからである。

「なんだ、あんなところに小屋をたてゝ路行く人に草鞋を賣つてゐるのか。」

やゝ暫らく思案してゐた旅人は、やがて草をわけ岩をつたつてそつちに降りて行つた。

「頼まう。」

聲に應じて荒莚をめくつて出て來たのはぼう〳〵と髯を伸ばした屈强な男であつた。

「私はこれから陸中に山越えしようとする者ですが、途中思はぬ

難儀に會つて、路銀を失つて困つてゐる有樣、ぶしつけながら一夜の宿を貸して貰へないだらうか。」

「それはお氣の毒な、御覽の通り蒲團も何もないが、それでもよければお泊り下さい。」

「それはかたじけない。」

中に這入つてみると、成程土間にわらを敷き、その上に莚を重ねただけの寢床、しかし夜路をかけて山越えするのは大變だから、雲水姿の旅人はわらの中にもぐり込んだ。

「以前にも一度、この難所を越えたことがあるが、その時にはこの小屋を見受けなかつた、一體いつ頃からこゝにお住みなされた。」

「去年の秋やつて來ました。」

「見たところ、百姓でも木樵でもない樣子、以前は何をして居られました。」

「桶屋で働いて居りました。」

「左樣ですか、しかしこんな山の中にゐるよりも、桶屋で働いてゐた方がよささうに思はれるが、またどうしてこんな處へ。」

「實はこの難所を越える人々の爲をはかりたいと思ひまして。」

「それはそれは奇特なお心がけですな。」

なる程、それで道行く人にわらぢなどを賣つてゐるのかと、旅人は初めて合點した。ところがこの藁小屋の主は、急に改まつた顏で言ひ出した。

「私はこの難所を切り拓きたいと心を碎いてゐるのですが、誰も眞面目に相談に乘つて呉れる者がありません、いつたい獨りでこの岩根を切り崩すことが出來るものでせうか。」

馬鹿久馬鹿久とばかり呼ばれて、この邊では誰も相手にされない龜田の久藏は、雲水姿の相手を人品いやしからぬ人と見て、さうたづねてみる氣になつたのであつた。

「えゝ、獨りでこの難所を。」

相手はびつくりして聲を呑んだ、こんな重疊とした斷崖を、獨りで切り崩すなどといふことは、迚も想像も及ばない氣がしたからである。

「見込みがないと言ふのですか。」

「いや、絶對に出來ないといふわけではないが。」

かたい決心を見せてゐる相手の顏に氣押されて、何となく、不可能とは言ひ切れなくなつてしまつた。

「それでは、出來るといふのですな。」

久藏は薄氣味わるいほどにつこり笑つた。

「いや、必ずしも出來るとは言はない、また出來ないとも言はないが。」

「とおつしやると。」

「一心巖をも通すといふことがあるから、絶對に出來ないといふことはない、昔からいふ話がある。」

雲水姿の旅人は、やがて寢物語に話し出した。昔ある山里に愚公といふ男がゐた。そこは谷間の村の事とて、農作物がよく出來ないのを憂へた愚公は、日當りのよい土地に移住することを村の人々にすゝめたが、先祖に申譯がないと言ふて相手にする者がない。そこで、木を植えても育たない、南側の山を切り崩す計畫をたてたが、これも人間術で出來ることではない、夢のやうな話だといつて誰一人話に乘る者がなかつた。そこで愚公は人を頼んではならぬ、獨りでやるべきだと考へて、その日から土をくづし石を運びはじめた。人々はそれを見て、手を叩いて笑つた。馬鹿にも程がある。獨りで山をくづさうなどとは、氣違ひ沙汰だと嘲笑つた。友達も頻りに止めたが、愚公は決心を翻さず、雨の日も風の日も、一日も缺かさず土を運びつゞけた。數年の月日が流れ、愚公の財産は盡きやうとしたが、山はほんの少し切り崩されただけであつた。しかし愚公は依然としてあきらめなかつた。村人はたゞ嘲笑ふばかりで、娘を嫁に呉れる者はなく、愚公は三十となり、四十となり、やがて白髮が生へ、數十年の月日が流れた。もう愚公を笑ふ者もなくなつた、しまいに愚公は、山かげの木が朽ち倒れるやうに、誰にも氣づかれず死んでしまつた。ところが、そのころには、昔の日かげの村は、いつの間にか、日當りのいゝ農作物のよく出來る村になつてゐた。村は次第に豐かになつていつた。人々ははじめて、それが、愚公が山を切りくづして呉れたおかげであることに氣がつくやうになつた。今では村の南側の山が半分以上切くづされて、村人達は日當りのいい毎日を迎へてゐるが、昔はじめ〳〵した日蔭の村であつたことを思ひ出したからである。

「いゝ話を聞きました、これですつかり私も安心しました。」

久藏は再び、今度は子供のやうに無心に笑つた。

「その愚公といふ男には、相當財産があつたらしいが、お主は、獨りでそんな大事業をやるほど財産があるのですか。」

旅人はます〳〵驚いた顏でたづねた。

「別に財産といふものはありません。」

さうすると、やつぱりあの草鞋を賣つて煙りを立てゝゐるのだなと、旅人は思つた。

「草鞋を賣るぐらゐで食べて行かれますかな。」

「米の飯などは滅多に口に這入りません、毎晩草鞋をつくつてあの木の枝にかけて置くのですが、夕方行つてみると、たいてい一足もなくなつてゐます。しかし錢を置いて行つて呉れる人は、さう澤山はありません。」

「置いて行つて呉れと書いて置いたらいゝでせう。」

「いゝえ、それはいけません、もと〳〵道路を切り拓かうと決心したのも、道往く人の難儀を助けやうためですから。」

久藏がこのことを思ひ立つたのは、市助といふ男が、子供をお

ぶつて通りかゝり、親子もろとも崖から落ちて死んだのを、眼のあたりに見たときからであつた。その時から、その崖は市助落しと呼ばれてゐたが、とん〳〵と桶のたがを締めながら鼻唄をうたつて聞かせて子供たちを集めて喜んでゐるといふ、大の子供好きの久藏は、そのときの子供の無幾な死際に、餘計に胸をゆすぶられて、ここで命を落した何人もの人々の供養の爲めにもと、崖をくづして安全な道を通す決心をしたのであつた。だから久藏は、往來の人の眼につくところに、たゞ默つて草鞋を下げて置いたが、一文の金も置かれてゐない日が、何日もつゞくことがあつた。久藏は空腹を忍びながら、毎日のやうに崖をくづし、川原の玉石を運び上げた。「今日も馬鹿久が働いてゐるよ」村の人達は遠くから其の有樣をながめて笑つた。そればかりではない、大人達がそんな風だから、以前は久藏によくなついた子供達までが、此頃では、すつかり氣違ひ扱ひにして、馬鹿久馬鹿久と呼びながら群り集つて來て、面白がつて石を投げつけるのであつた。

子供はやむを得ないとして、厄介なのは、大人のなかにも亂暴を働く者のあることであつた。それは半助村の便助といふ男があつた。獨りで道路を切り拓かうといふ男だけあつて、久藏は幼いときから力が强かつた。やがて、角力ではこの近在で誰も相手になる者がないといはれてゐた半助村の便助にも土をつけてしまつた。村の大關をもつて任じてゐた力自慢の便助は、その鼻柱をへ

し折られたことを深く遺恨に思ひ、久藏が眞人のへぐりに小屋がけして、道路工事を始めたのを見ると、これ幸いとばかりに邪魔をした。仕事をしてゐる久藏めがけて崖の上から岩をころがしたり、折角運び上げた河原の玉石を、川底に落してしまつたり、事ごとに仕事を妨げた。久藏はしかし、相手にならなかつた。便助がどんな邪魔だてをしようが、振り向きもせず、默々として、岩を碎き、土をくづした。

しかし、獨りの力では、仕事は思ふやうに進まなかつた。一つの玉石を川原から運び上げるのにさへ、何日もかゝつた。一つの崖の岩を碎くのにも、何箇月もかゝつた。激流岩を嚙む成瀬川に臨んだ何百間の斷崖は、一年たつても二年たつても、びくとも動かないもののやうであつた。時たま二年たつても、びくとも動かないもののやうであつた。時たま米味噌をもつて慰めに來て呉れる香最寺の州嚴和尙の外には、依然として誰も相手にして呉れる者がなかつた。何日ものまず食はずに働いて、ついに起き上る力も失つて、藁小屋に倒れ伏してゐる時など、流石の久藏ももうこれまでかと思ふことが幾度もあつた。さういふとき、きまつて久藏の眼に浮んで來るのは、いつかの夜の雲水姿の旅人から聞いた愚公といふ男の話であつた。獨りで山をくづした努力にくらぶれば、こんな崖を切り拓くことくらい何んでもない。さう考へると、またのこ〳〵と久藏は小屋を立ち出で、山のあちこちを這ひづり

廻つて、山茱を取つて來て鍋に入れ、やがて草鞋をつくつて、またもや、道路工事に取りかゝるのであつた。勇氣がくぢけやうとするとき、久藏はいつもあの雲水姿の旅人の話を思ひ出した。さうしては再び明日の困難に立ち向つていくのであつた。

二年たち三年たつた。仕事はやうやく眼に見えて進んでゐた。斷崖の岩は次から次へと切りくづされた。遠く增田の里の方からさへ、禿のやうに赤く、眞人山の一角が、切りひらかれてゐるのが眺められるやうになつた。ところが、やがて、新しい困難が、さらに久藏の前に立ちはだかつた。岩を切りひらいて進むうちに、押せども打てども、びくともしない一塊の巨岩に突きあたつたのであつた。いくら力まかせに鑿を打ちこんでも、猿面石といふ堅い岩石は、てんで受けつけず、鑿は輕く跳ね返されるのであつた。

久藏ははたと當惑した、この上は神明の加護を願ふより外に途がなかつた。久藏はこの日から明澤（あけざは）の金峯山の權現にお百度參りをはじめた。頂上の神社にいたる路はけはしく、夜の參詣は並大抵の苦勞ではなかつたが、道路工事に命をかけてゐる久藏は、一度もおこたらなかつた。一日の仕事を終つて、數足の草鞋をつくり上げると雨の夜も風の夜も、金峯山に通ひつづけた。さういふ久藏を見て、嘲笑ふものは村の子供たちだけではなかつた。毎夜のやうに狸どもが腹大鼓を打つて、馬鹿久々々々と囃し立てた。久藏はしかし、石を投げる子供達や、邪魔だてをする便助をまるで相手にしなかつたやうに、素知らぬ顏で通りすぎた。狸どもは口惜しがつて、手をかへ、品をかへて久藏をばかしてやらうとかかつた。しかしどういふものか久藏は一向ばかされなかつた。どんな暗い夜でも、路も間違へず、足も路もふみはづさずに往き還りした。

ある月の夜に、久藏がいつものやうに權現に參詣して戻つて來ると素裸になつた男が一生懸命に路ばたの岩と取り組んでゐた、腰をかゞめ兩手を地べたに降したかと思ふと、やつと叫んで、岩にぶつつかつていく。「久藏の野郎、まだ降參しないか、ようし」素裸の男はさう怒鳴つた。自分の名前が出たので誰だらうと近づいて見ると、それは便助であつた。一匹の狐が、右手の丘の上にちよこりんと坐つて、しきりに首を上げ下げしてゐるのを、久藏は見つけた。狐が首を下げると、便助はわアーつと叫んで岩に飛びかかつていく。首を上げるともとのところに戻つて來る。月の光で、その便助の毛むくじやらの胸が血だらけになつてゐるのがわかつた。路ばたに置いてある荷俵のなかには、お膳の料理が這入つてゐた。便助はどこかの婚禮にでも招ばれて、一杯機嫌で戻つて來たものらしかつた。久藏は石を拾つて、狐めがけて投げつけた、狐は逃げ去つた。血だらけになつた便助はやうやく我に歸つた。「お前が通りかからなかつたら、俺はあの岩と組み打ちして死んでしまつたかも知れない、おかげで命拾ひしたよ」はじめて

便助は、それまでの自分の非道な仕打ちを、久藏にあやまつた。ついにお百度參りの滿願の日は來た。久藏はいそ〳〵として金峯山をめざしたが、その夜は一寸先もわからない闇の夜であつた。流石の久藏も行きなやんだが、山のふもとまで來ると、無數の松明があらはれて、久藏の行途を照らした。それはあの狸どもであつた。手に手に松明をかざした狸どもは、久藏には負けた、久藏には負けた。と嘶したてながら、久藏の左右をまもつて、權現めざして進むのであつた。山の中腹まで來たとき、突然一人の山男が行途に立ちふさがつた。

「おい〳〵お前は久藏だな。」

久藏はうなづいた。

「猿面石の岩をどうして碎くかと云ふのだらう。それなら、岩の上にどん〳〵火を焚いてから、タガネで打ち割るがいい。」

翌る日から久藏は、その言葉に從つて例の巨岩を碎きにかかつたが仕事は面白い程どん〳〵はかどつた。しかも不思議なことは、それまでは、たゞで草鞋を持つて行く者ばかりであつたが、三日に一度ぐらゐは、袋米を買ふことが出來るぐらゐの錢がそこに置いてあることがあつた。久藏は、もう空腹でぶつ倒れなくてもよかつた。朝は暗いうちから、夕べは手もとが見えなくなるまで、いくらでも働くことが出來た。勇氣は百倍した。仕事はどん〳〵はかどり、びくともしなかつた斷崖は、それからそれへと切りひらかれていつた。

天明元年の春も酣のころ、眞人山の難所は、ついに見事に切り通された。赤松茂る崖のもと、成瀬川の淵に臨んで、坦々たる道が通つた。命をかけた久藏の六年間の不眠不休の努力は、終に報いられたのだ。もう人々はここで行きなやむことはなかつた。斷崖から足を踏みはづして、命を失ふ者もなかつた。奥羽山脈を越えて陸中に出るその手前で、無駄な宿りしなくても濟むやうになをつた。闇狩澤を何里も迂廻する代りに、樂々とこの近道を往來することが出來た。人馬の往來はいよ〳〵繁くなつた。しかし、人々は直きに久藏の存在を忘れた。咽喉もと過ぐれば熱さを忘れるのたとへで、以前どれほどこの難所を通るのに苦勞したか、どれだけの人が無殘な死方をしたか、闇狩澤を迂廻することがどれほど不便であつたか、といふことを忘れてしまつた。誰も久藏を思ひ出す者がなくなつた。

新らしい道路の有難さを忘れないものは、それを切りひらいた久藏だけであつた。久藏は依然として、心ない人馬の往來が取りこはす道路の修理を怠らなかつた。神明の加護に對する感謝を忘れなかつた。

しかし、久藏は依然として無一物であつた。そこで、金峯山の權現に奉納することを誓つた五尺桶に三本の御神酒の寄附を、村々の造り酒屋に願つて歩いた。ところが、誰も寄附をして呉れな

かつた。餘りに大袈裟な奉納であると言つて、一人として應ずる者がなかつた。

何を思つたのか久藏は、半助村から西南に四、五町離れた、鳥海山の秀麗な山の姿を遙かに望まれるやや小高いところに、せつせと穴を掘りはじめた。穴が出來上ると、その上に小屋をかけ、四十八日目に小屋を取り去つて見て呉れと村の人々に告げて、やがて久藏はその穴のなかに這入つた。そのまま久藏は、何日も出て來なかつた。四十八日目に人々は思ひ出して、その小屋を見に出かけた。莚をめくると馥郁たる御神酒の香りが流れて來た。そこには久藏のむくろの代りに、五尺桶、三本の御神酒があつた。眞人のへぐりの人馬往來はいよ〳〵繁くなつたが、誰も久藏を思ひ出すものがなかつた。道路が出來上つた時、久藏自ら眞人山の草むらに建てた記念の石碑は苔むして、やがてそれは、心ない木樵たちに打ち折れてしまつた。凡そ五十年の年月が流れて世は天保のころとなつた。京都東山の政五郎といふ行者が通りかゝつて、半助村の百姓淮左衛門のもとに逗留した。

「昔ここに龜田の久藏といふ人が居つて、道路をつくるのに、骨折つたといふことですが。」

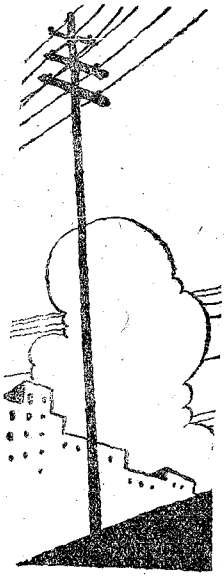
政五郎は何か仔細ありげにさう言ひ出した。

「左樣、この眞人のへぐりの道路は、その久藏が獨り切りひらいたものと言はれてゐます。」

「えつ、たうとう獨りでやり遂げたのですか、やつぱり。」

溜息をつくやうに、政五郎はさうくり返した。

「さう言ひますが、何か思ひあたることでもあるのですか。」

「はい。實は、私のお爺さんが、その時分、その久藏といふ人の小屋に、一夜の宿を貸してもらつたことがあるのです、お爺さんはもう三十年も昔、私の子供の時分に亡くなりましたが、その話を何度も聞かされたものなので、今度奥州下りの路すがら、この街道を通つて見る氣になつたのです、お話を聞いて、やはり來た甲斐がありました。」

さも滿足さうに政五郎は言つたが、翌々日から自ら石を刻んで、久藏の碑を眞人山に建てて立ち去つた。その石碑は今も眞人山に殘つてゐる。